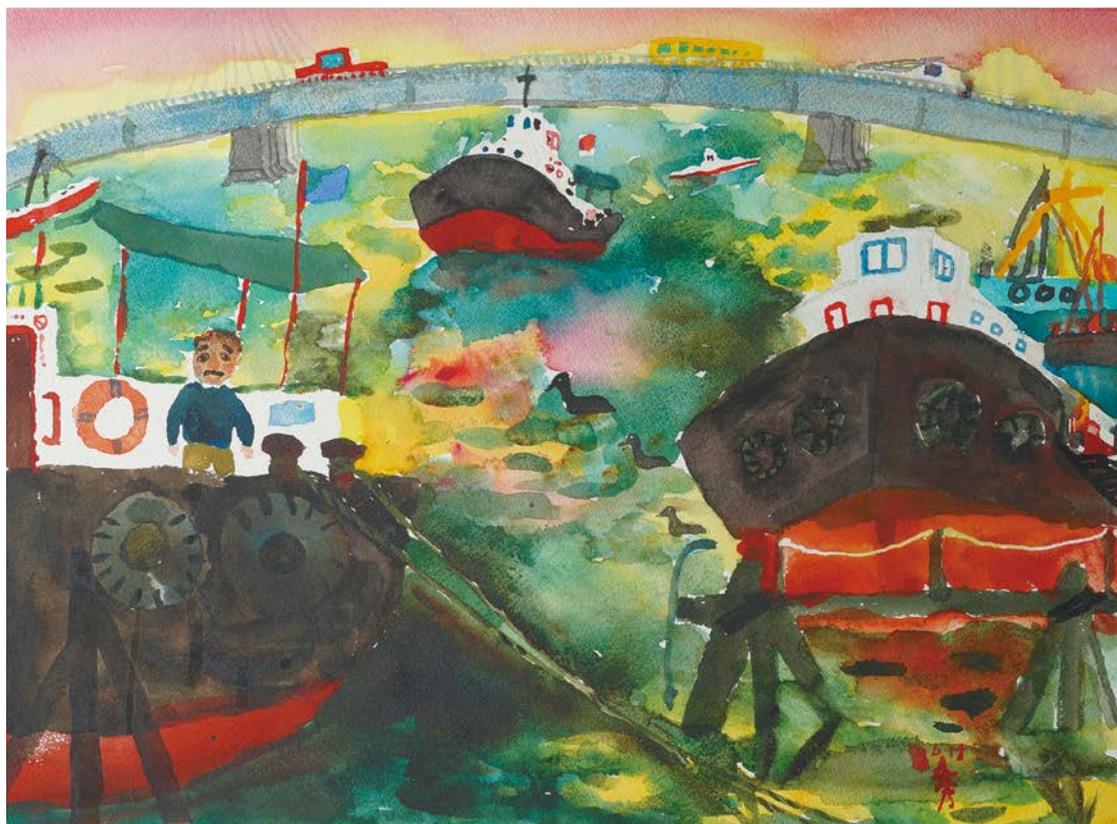


名古屋 文化 情報

2026
Spring

No.417
NAGOYA
Cultural
Information

Pick Up Gallery/Gallery HAM
特集/2025 1年をふりかえって
令和7年度 名古屋市芸術賞・名古屋市民芸術祭賞
#zoom up/バレエダンサー 長谷川元志さん



2026

Spring

Contents

Pick Up Gallery Gallery HAM 2

2025 1年をふりかえって..... 3

令和7年度 名古屋市芸術賞 8

令和7年度 名古屋市民芸術祭賞 9

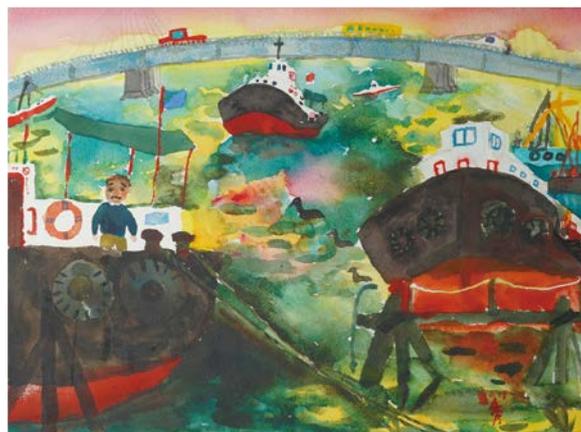
#zoom up バレエダンサー 長谷川元志さん 10

表紙

「名古屋港船溜まり」

(2018年 / 327×435mm / 紙、水彩)

スケッチをしながら船長さんと話をしていたら、船に乗せてもらって道中も描いてみたいなと思いました。



伊藤秀男

1969年 名古屋市立工芸高等学校デザイン科卒業
 1971年 名古屋造形芸術短期大学造形芸術科洋画コース卒業
 1992年 絵本『海の夏』(ほるぷ出版)で第41回小学館絵画賞受賞
 2002年 絵本『けんかのきもち』(ポプラ社)で第7回日本絵本賞大賞受賞
 2015年 平成27年度企画展 現代作家シリーズ「えということば 伊藤秀男展」(一宮市三岸節子記念美術館) 他、東京・名古屋で個展多数
 ウェブサイト <http://www.itohideo.com/profile/index.html>

「なごや文化情報」編集委員

- 大寺資二 (舞踏家・大寺資二バレエアカデミー主宰)
- 黒田杏子 (ON READING)
- 小塚憲二 (作曲家・編曲家)
- 鈴木敏春 (美術批評・NPO法人愛知アートコレクティブ代表理事)
- 常磐津綱鵬 (常磐津奏者)
- 望月勝美 (編集者・ライター)

Pick Up Gallery

Gallery HAM(ギャラリー ハム)

1992年、名古屋市東区に設立。神野公男はコレクターからギャラリストに転じ、当時最先端であったドイツの作家たちの作品を日本に紹介し、知らしめるのに専念。カール・ポーマンを始め秀逸な作品が並んだ。ヴェートリッヒは愛知県美術館でもグループ展を。草間彌生、田中敦子・金山明夫妻の作品をいち早く評価し企画展で展示発表。1990年末からケルンやバーゼルのART FAIRにも積極的に参加。

神野公男はコロナ禍に病状悪化で逝く。彼の意志を継ぎ「未見のものを見たい」という要求を満たしてくれる作家作品の展開を見続ける現場として、現在は千種区に移転して続行中。

作間敏宏展『接着/交換』インスタレーション(2025年11月15日~12月20日)▶



設立 1992年 代表者(ディレクター) 伊藤(神野)祥子 取り扱い作家 草間彌生、田中敦子、金山明、先間康博、セシル・アンドリュ、鈴木孝幸、大和由佳、ナオ・カワノ・フジイ、作間敏宏、中條直人
 住所 〒464-0075 名古屋市千種区内山2-8-22 ウェブサイト <http://1210.g-ham.com>
 電話 052-731-9287

2025

1年をふりかえって

洋舞 上野茂 (ナゴヤ劇場ジャーナル編集長)

2025年、洋舞界のハイライトは、松岡伶子バレエ団の創立70周年記念公演「白鳥の湖」(11月30日・愛知県芸術劇場大ホール)である。バレエに限らず、同一主宰者による「70周年」は極めてまれで、チケットは当日までに全席が完売した。特筆すべきは、主役のオデット姫に新国立劇場バレエ団から小野絢子を迎えたこと。人材豊富な松岡バレエに、あえて客演を迎える必要があったのか、と指導者の松岡璃映に聞くと「今、日本で一番美しくオデットが踊れるのが彼女」と作品重視を強調。チケット完売も納得だ。

さて、25年は中小のダンス公演にも優れたプログラムが続出した。現代舞踊協会中部支部では東区の徳川古民家ギャラリー結を会場に「モダンダンス・エクステンション」(2月1、2日)を開催。2日間で14組が出演し、日本古民家特有の空間で、趣向を凝らした創作舞踊を披露。日舞や演劇の経験がある中根千秋が、ギターを生演奏と朗読を交え、シュールな空間を描出したのが印象に残った。

同月、名古屋洋舞家協議会が「Dance freedom' 25」(2月11日・アマノ芸術創造センター名古屋)を実施。バレエ、モダン、ジャズなど16グループが出演し、演出とテクニックを競った。群を抜いたのは今村早伽の「verano porteño (ブエノスアイレスの夏)」。バレエとタンゴが混在するスリリングで官能的な振付で観客を魅了した。



「ブエノスアイレスの夏」を踊る今村早伽

ダンスに演劇を交えた独自のスタイルを貫くナオミダンススクール(主宰・榎原菜生未)が40周年を迎え、記念公演「スパイラルアップ」(5月5、6日・千種文化小劇場)を行った。さまざまなキャリアを持つ36人の出演者が、戦時中から今日までの社会と風俗を舞踊劇でつづった。

3人のコンテンポラリーダンサー(観月紀栄、服部絵里香、カジヤマテルヨ)がユニットを結成。初の劇場公演「月華」

(8月8日・愛知県芸術劇場小ホール)を催した。心象的でおやかなダンス、客席通路やキャットウォークを使った躍動的なパフォーマンス、工夫を凝らした照明…。どうしたら観客に喜んでもらえるのかを考え抜いた公演だった。



観月紀栄、服部絵里香、カジヤマテルヨの「月華」

2025年の名古屋市民芸術祭舞踊部門からは2件の特別賞が選出された。深川秀夫作品に果敢に取り組んだ「アカデミー国枝バレエ」(11月30日・青少年文化センターアートピアホール)と、フラメンコ内田好美のソロ公演「徨Vagar」(11月9日・東文化小劇場)である。前者は若いダンサーたちの奮闘に好感。後者は日本人離れした演奏陣とオリジナリティーにあふれる内田のダンスに引き込まれた。

年末にはジャズダンスの「studioM」(主宰・小田真砂世)の35周年記念公演「History」(12月6、7日・東文化小劇場)が光彩を放った。バレエ団やストリート系ダンスグループなど計5団体、総勢52人が出演し、ダンスの発祥から近年までを様々なダンススタイルで披露。観客に踊る楽しさ、見る面白さを堪能させた。

演劇 小島祐未子 (編集者・ライター)

2025年は若手の活躍が目立った。2022年旗揚げのハコトバコは10月の「BRUTE」で果敢な創作に挑んでいた。舞台は動物園。新人の栗原理久は「ホミニス」というヒトそっくりの生き物を担当することになり、謎多き生態に戸惑いながらも仕事と真摯に向き合う。ところが、園内のニホンザルと特定外来生物の交雑が発覚。そのせいで生まれた雑種の大量殺処分が行われ、理久は苦悩する。やがて「地球を破壊する危険生物」とされてきたホミニスにも殺処分が迫り…。ホミニスとの交雑種だとわかった主人公の恋人を客席に座らせる演出など気概を感じる趣向が多い中、何より良かったのは人物造形だ。特に先輩飼育員や獣医師ら科学者のある種の冷徹さが圧巻。それでいて全員がチャーミングで、劇作・演出・

俳優の作業がうまく溶け合っていた。結果、彼らは名古屋市市民芸術祭賞（演劇部門）を受賞している。



ハコトバコ「BRUTE」（10月10日～13日 G/PIT）

合同公演「吉報」を続ける老若男女未来学園、劇団サカナデ、喜劇のヒロインの3団体もユニークな活動を見せた。1月には吉報vol.3「のびる」で各団体が短編を上演。10月には長久手市文化の家の野外企画に招かれ、石作神社を舞台に持ち味豊かな競演で訪れた人たちを楽しませた。なお、劇団サカナデは11月に「この音はどこまで」で名古屋市市民芸術祭特別賞（奨励賞）に選ばれている。

中でも喜劇のヒロインは精力的だった。文化の家が3月に開催した野外企画でも好演。12月には「生乾いた笑い」で「笑い」というものに真正面から取り組んだ。ある干物メーカーを描く同作は職場におけるユーモアの功罪を浮き彫りにして痛快だった。コミュニケーションを円滑にするユーモアも人によっては不要・不快なのに、否定するのは難しい。偽りの笑顔を強いられているかもしれない職場環境と干物の産地偽装疑惑を二重構造で展開させた点も面白かった。主宰の新宮虎太郎は11月に「生まれる！」で第31回劇作家協会新人戯曲賞の佳作に入選しており、脂がのっている。



喜劇のヒロイン「生乾いた笑い」（12月25日～29日 セツ寺共同スタジオ）
（撮影：夏目圭一郎）

一方でベテランの作品も印象深い。2月の北村想×perky pat presents「空がとってもあおいからⅡ」は前年に発表した作品の続編。舞台であるミルクホールの焼け焦げたカーテンが開くと、フレーム（額縁）越しに物語が展開していく。やって来るのは核戦争後の世界を旅してきた男と戦災孤児。北村の名作「寿歌」を巡るやり取りもあってメタ構造の劇はコミカルにも映るが、男の見た遺体の話などから惨状も伝わ

ってくる。終盤に語られる荒野に咲いた一輪の赤い薔薇は悲劇的状况の中にも存在する美や救いの象徴だろうか。終幕、登場人物たちはフレームの外＝現実世界へと歩み出すが、その先にある修羅を想うと震えた。

1980年設立のクセックACTは5月にセルバンテスの「ドン・キホーテ…狂気を演じ続けて…」で解散公演を敢行。4度目の上演を数える代名詞的な演目だが、あらためて狂気とは何か問いかけた田尻陽一の台本、「動く絵画」とうたわれた神宮寺啓の演出や美学が冴え、見事な幕切れだった。

洋楽 ▶ 早川立大（音楽ジャーナリスト）

〔器楽〕オーケストラを中心に話題の多い1年だった。まずは愛知県内に拠点を持つ4つの楽団、名古屋フィルハーモニー交響楽団（以下、名フィル）、セントラル愛知交響楽団（セントラル愛知響）、中部フィルハーモニー交響楽団（中部フィル）、愛知室内オーケストラ（愛知室内）が初めて一堂に会し、ブラームスの交響曲全曲を演奏したこと（8月31日、愛知県芸術劇場コンサートホール）。1番は愛知室内、2番を中部フィル、3番はセントラル愛知響、4番を名フィルが分担した。満席の盛況下、難しい第3番を豪快精緻に佳演したセントラル愛知響をはじめ、各楽団とも熱気にあふれ、持ち味を存分に発揮した。

名フィルの第538回定期演奏会でダウスゴー指揮、ブルックナー「交響曲第8番」の第2日（10月11日、同）に「フライング・ブラヴォー」が起きた。名フィルは直ちに「終演後の早すぎる『ブラヴォー』は私どもにとってうれしいものではございません」と失望感をSNSで発信。これに対する閲覧数が4800万を超えた。事務局に寄せられた直接の反応は肯定的な意見が多かったという。セントラル愛知響はハイドンの最後の交響曲、「ザロモン・セット」全12曲の演奏を完遂した（12月4日、電気文化会館ザ・コンサートホール）。2019年の第1回から毎回2曲ずつを番号順に取り上げ、6回で仕上げた。進取に富んだハイドン作品の精神が音楽監督角田鋼亮の卓越した指揮により、軽快にはつらつと表現され秀逸だった。



セントラル愛知響 ハイドンの精神Vol.6
（12月4日 電気文化会館ザ・コンサートホール）（撮影：中川幸作）

ソロでは国際的に活躍する名手、竹澤恭子がバッハの無伴奏ヴァイオリン・ソナタ&パルティータ全6曲に挑んだ2回のリサイタルに指を屈する（11月15日、29日、宗次ホール）。現時点での彼女のバッハ研究の集大成といえる入魂の、見事な出来栄えだった。アメリカやフランスで研鑽を積んだ新鋭ピアニスト堀夏紀は、2回のリサイタルにおいてドビュ

ッシーのベルガマスク組曲やコーブランドのソナタで豊かな成果を披露した（3月1日、11月23日、電気文化会館ザ・コンサートホール）。



竹澤恭子 J・S・バッハ無伴奏ヴァイオリン・リサイタル
(11月29日 宗次ホール)

〔声楽〕オペラでは、藤原歌劇団が愛知県芸術劇場などと共催したヴェルディ『ファルスタッフ』（2月8日、愛知県芸術劇場大ホール）以外に、地元団体によるめぼしい公演がなかった。セントラル愛知響がピゼー『カルメン』ハイライト（3月22日、愛知県芸術劇場コンサートホール）、愛知室内がモーツァルト『コジ・ファン・トゥッテ』演奏会形式（3月29日、東海市芸術劇場）で空隙を埋めた。

歌曲ではソプラノ加藤佳代子のフランス歌曲コンサート（6月14日、電気文化会館ザ・コンサートホール）、メゾソプラノ相可佐代子のリサイタル（10月17日、同）を挙げよう。それぞれがフランス歌曲を取り上げ、歌詞の内容を的確に表現しながら、表情豊かな歌唱を聴かせた。

中部フィルをその創成時から訓育し、国際的にも活躍した長老指揮者の秋山和慶さんが1月26日に84歳で、名古屋二期会理事長の水谷和樹さんが12月2日に71歳で、亡くなった。この地方の音楽界に多大の貢献をしただけに、大きな損失となった。

能楽 飯塚恵理人（椋山女学園大学教授）

2025年の名古屋能楽堂定例公演からいくつかの好舞台を紹介する。

1月3日「正月特別公演」。《翁》の山階彌右衛門は謡の音量があり厳かで堂々とした翁大夫であった。またこの《翁》で井上蒼大が三番叟を披いたが、師父井上松次郎伝授の狂言共同社の型に忠実で、身体の切れが良い元気はつらつとした三番叟であった。さらに後藤嘉津幸の小鼓頭取で名古屋の幸清流の翁の囃子が聴けたのが嬉しかった。

3月2日「三月特別公演」。今枝郁雄の《花折》は、今枝の酒につられて参詣人を入れてしまうところ、いかにも酒好きの新発意らしく表現していた。また酔ったあげくに参詣人達に花を折って渡し、帰ってきた住持に叱られてしまうが、住持の怒りをごまかして逃げようとするしたたかさ、怒られ慣れている雰囲気もうまく表現していた。井上松次郎をはじめとする参詣人の小舞も楽し気で、春にふさわしいおおらかな《花折》の好演だった。

5月17日「五月定例公演」。吉沢旭の《三輪》は、謡の上手さで定評のあった泉嘉夫師の最晩年の弟子であった吉沢らしく神らしい気高さが感じられる謡でとても良かった。ワキ



〔五月定例公演〕吉沢旭《三輪》
©公益社団法人能楽協会

玄寶僧都の飯富雅介は、「山頭には・・・」の謡が静かな晩秋の山の美しさを感じさせてとても良かった。7月5日「七月定例公演」。《羽衣 替ノ型》の本田布由樹は盤渉調の序之舞が美しく、日頃の修練の成果が発揮されたものと思われた。またここでは笛：山村友子、小鼓：船戸昭弘、大鼓：河村裕一郎、太鼓：加藤洋輝という名古屋メンバー揃いの囃子が大いに盛り上げてくれた。9月7日「九月定例公演」。《源氏供養》の長田郷はシテ謡が口跡よく、真摯に光源氏の成仏を祈る雰囲気があったのと、クセ舞が典雅であった。狂言は鹿島俊裕の《弓矢太郎》。鹿島のシテ太郎は臆病なくせに虚勢をはる男を、狂言らしく上品に面白く演じて秀逸であった。もう一番の能は久田三津子の《葵上 梓之出》。シテの久田の前場の「枕之段」が身体の切れよく「今八打たで八叶ふまじ」という葵上への怒りと源氏に思われぬ哀しみが良く表現されていた。対してワキ横川の小聖（橋本幸）と対峙する場面では身体が切れて迫力があつた。久田は囃子を大切に舞に定評がある。この《葵上》も久田の日頃の修練の成果が出たと思う。

10月19日の「十月定例公演」。狂言は野村信朗（野村小三郎（2026年2月8日に襲名披露）の《苞山伏》。真犯人である道行人（野村又三郎）に濡れ衣を着せられた山伏（野村信朗）が祈りによって真相を明らかにしようとする。信朗の祈りの様にも又三郎のなかなか白状しない演技にも狂言らしい面白さがあった。衣斐愛の《弱法師》は特にシテ謡の上手さが光った。シテの一セイの「出入りの・・・」から上品な少年が零落した様を表し、その立ち姿も相まって貴種流離譚のような趣きがあった。またワキ高安通俊（橋本幸）との問答は橋本の風格のあるセリフもよく、シテ・ワキ共に好演であった。



〔九月定例公演〕鹿島俊裕《弓矢太郎》（写真左）
©公益社団法人能楽協会

邦楽・邦舞 北島徹也 (CBCテレビ調査役・金沢大学共同研究員)

歌舞伎界を題材とした映画『国宝』の歴史的なヒットの影響を受け、『吉例顔見世』(10/11~26 御園座)も昼の部が完売、襲名披露の八代目尾上菊五郎と菊之助の「京鹿子娘二人道成寺」は大きな拍手に包まれた。

西川流の『名古屋をどりNEO傾奇者』(10/11、12 岡谷鋼機名古屋公会堂)は『元禄おんな忠臣蔵』と題し、冥界での忠臣蔵後日談。フィギュアスケートの高橋大輔をゲスト出演に迎えた「NEO舞踊劇、だが、エンタメ演劇のよう。観客というマーケットに古典はどう対峙していくのか、その答えの一つとして受け止めておこう。第2回『章之人の会』(4/21 市民会館ビレッジホール)の「綱館」で章之人が実力を見せた。『長寿乃會』(5/24 Niterra日本特殊陶業市民会館(以下、市民会館)ビレッジホール)もあった。

『朱ぞくら会』(5/28 千種文化小劇場)は「クラシックモダン、と銘打ち、かねてから花柳朱実が挑んでいたクラシックやミュージカル、タンゴの日本舞踊での表現を集大成、こちらは古典の身体表現での、現代への対峙である。

五條流は『珠園会』75周年記念公演を御園座で開催(7/20)、園美と麗の、かっちりとした「吉野山」のほか、門弟も大いに活躍、殊に園八王と美佳園の「二人椀久」は感銘を刻んだ。園美は主宰する「創の会」の『お江戸の賑わい小品集～生の演奏と日本舞踊～ お話を交えた優雅なひととき』(12/13、14 名古屋能楽堂けい古室)で少人数の会場ながら気のいった会を企画した。



常磐津「吉野山」(左から)五條園美、五條麗

『赤堀会』(6/8 市民会館ビレッジホール)で加鶴繪は粋な装いの「都鳥」、創作舞踊『瓢箪から駒』は次々に飛び出す奇想天外な曲と衣裳に驚かされつつ楽しむことができた。

『内田流舞踊発表会』(10/5 市民会館ビレッジホール)で有美は「お祭り」、寿子は創作「寂～建礼門院」で枯淡を表現。

瑞鳳澄依は『芸術鑑賞会～日本の伝統文化を未来の子供たちへ～』(9/23 市民会館ビレッジホール)で長唄の名曲「虎狩」、登場人物の踊り分けが巧みだった。

稻旺由将は『沢湯会』(4/26、27 市民会館ビレッジホール)での「妹背山道行」で気を吐いた。

2025年で印象に残った舞台は「やっとかめ文化祭 DOORS」の一つ『新作日本舞踊「生きとし生けるもの」』(11/8 名古屋能楽堂)である。一幕で各流派の若手舞踊家がそれぞれJ-POPを中心に選曲し構成した舞台に息を吞まされたが、結no KAI(稲垣舞比、内田有美、工藤彩夏、五條美佳園、西川古祐、花柳磐優、結月櫻)の振付・演出による、二幕の新作「生きとし生けるもの」は、生命なるものの誕生から成長、宿

命としての死、そして新たな生命の芽吹きを表現し、日本舞踊の表現の可能性を示した、再演に耐え得る作品である。



やっとかめ文化祭 新作日本舞踊「生きとし生けるもの」
(11/8 名古屋能楽堂)

長唄は、杵屋勝桃・勝千華『桃華の会』(5/11 昭和 문화小劇場)が楽団ももはなの年少演奏家とともに、杵屋見音代・見佳『見音代会』(5/31 今池ガスホール)は立方を入れた「都鳥」、『杵三会』(8/10 今池ガスホール)は昨年度名古屋市芸術奨励賞受賞の記念として能楽とコラボした創作「吉野天人」が興味深く、杵屋六秋・六春『長唄おやこ会』(11/8 今池ガスホール)は「五代目杵屋勘五郎の世界」をテーマに催された。

箏曲正絃社は創立60周年記念で御園座公演『看雲聴水』(9/23)を、回り舞台を用いる「回転木馬」をはじめ、野村正峰の衣鉢を継ぐ多くの門弟と人間国宝 野村峰山、野村祐子家元ファミリーで盛大に催された。

恒例の『名古屋邦楽大会』(11/23 中電ホール)、また、一昨年終会した名吟会から有志で新たに立ち上げられた『名邦会』(11/1 御園座)が名妓連 金丸卒寿の祝賀も兼ねて催されたのは「芸どころ、の意地であろうか。

美術 高橋綾子 (美術評論家・名古屋造形大学教授)

ロシアによるウクライナ侵略、パレスチナでの戦闘、イスラエルとイランの軍事衝突など不安定な世界情勢が継続した2025年、日本は戦後80年の節目の年だった。この年のアクチュアルな「美術」の状況を背景とした展覧会としては、まず3年に一度開催され、6回目を迎えた愛知県の国際展が挙げられる。愛知芸術文化センター、愛知県陶磁美術館と瀬戸市のまちなかを会場とした国際芸術祭「あいち2025」は、芸術監督にアラブ首長国連邦出身で国際的な影響力を誇る



国際芸術祭「あいち2025」展示風景ムルヤナ《海流と開花のあいだ》2019-
©国際芸術祭「あいち」組織委員会

キュレーターであるフル・アル・カシミを迎えて、「灰と薔薇のあいまに」という文学的な含意によって立場や解釈の二極化を避けながら、世界の紛争と環境破壊などの危機への思考を促すという啓蒙的なテーマを掲げていた。愛知県美術館での展示はゆったり鑑賞でき、若い観客が愉しげにスマートフォンを作品にかざしている様子も印象的だった。

なお愛知県美術館は、「パウル・クレー展－創造をめぐる星座」が優れて学術的な成果を発揮し、改修工事のため休館していた愛知県陶磁美術館がリニューアルした。2026年4月から、この2館の「地方独立行政法人愛知県美術館機構」への統合が発表されたことにも注目したい。これによって運営の効率化ばかりが優先されない、柔軟性と充実を期待したい。

名古屋市美術館は常設展の充実が目立った。「匹亞会結成70年 結成前夜」や「近代名古屋の日本画界」は出色で、後者では初紹介の画家を含む30人以上の日本画家が紹介された。学芸員の世代交代を背景としつつ、研究の継承と更新への期待が高まった。館の特徴を踏まえた地道な学芸員による調査研究という面では、一宮市三岸節子記念美術館の「中谷ミユキ展 一語り合う静物」と「岡田三郎助 優美な色彩・気品ある女性像」が挙げられる。



名古屋市美術館「近代名古屋の日本画界」展示風景

30周年を迎えた豊田市美術館は、高橋節郎館のリニューアルオープンもあり、隣接して2024年に開館した豊田市博物館とともに、美しい建築空間と文化ゾーンとしての魅力がますます発揮された。特に新鮮だったのは1990年生まれ気鋭の若手による大胆な作品空間が創出された「玉山拓郎：FLOOR」。そして「アンチ・アクション 彼女たち、それぞれの応答と挑戦」は、戦後美術にジェンダー研究の観点に対応した意欲的かつ時季を得た内容で見応えがあった。

また「瀬戸現代美術展2025」や清須市はるひ美術館の「城戸保 駐車空間、富士景、光画」の充実によって、愛知県を拠点とする中堅アーティストたちの存在が頼もしく印象付けられた。一方で、80歳を超えた現役作家の健在ぶりが嬉しい展覧もあった。名古屋画廊での「庄司達展－垂れ布シリーズ2025－」は旧作からの新たな展開が示され、碧南市藤井達吉現代美術館での「吉岡弘昭展 哀しみとおかしみを混えた不思議な魅力」は、約60年に及ぶ気骨ある画業が総覧された。

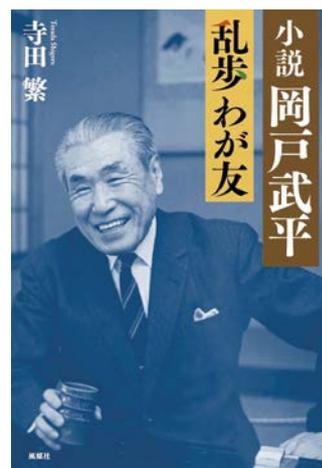
最後に「戦後80年」を謳った展覧が多くはなく、芸術環境の変化への予兆が気になる一年であったことも付け加えておく。

文学 劉永昇（風媒社 編集長）

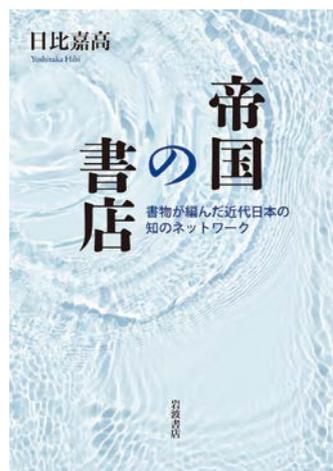
2025年は戦後80年かつ昭和100年にあたり、先の戦争が遺した記憶、そして〈昭和〉という時代が生み出した功罪を再検

証する本が数多く出版された。特別な年であるだけに、この視点から名古屋の文学・文芸を概覧したい。

名古屋出身のノンフィクションライターであり、愛知県内の大学で教鞭をとる藤井誠二が企画した『ソウル・サーチン～「沖縄」を描き続ける男・新里堅進作品選集および評伝～』（リイド社）は、漫画家・新里堅進（沖縄在住）氏の代表作を収録した912頁に及ぶ大冊。現在、東京と沖縄で二拠点生活を送る藤井が、沖縄戦を描き続ける新里氏の作品を発掘・紹介し、評伝を描き下ろしている。伝説的な劇画作家・新里の再評価を促すとともに、本土がもつ記憶からは、沖縄がアジア・太平洋戦争最悪の戦場であったという最も重要な歴史的事実が欠けていることを強く訴える。戦後80年とは遠い昔のように感じる年月だが、寛解しない現実の〈傷〉が、今もなお残っていることを突きつけてくる。



寺田繁『小説 岡戸武平 乱歩わが友』（風媒社）



日比嘉高『帝国の書店』（岩波書店）

文芸同人誌『北斗』所属の寺田繁『小説 岡戸武平 乱歩わが友』（風媒社）の帯には、「昭和百年を記念するにふさわしい労作」との文字がある。名古屋演劇ペンクラブ理事長・ねんげ句会同人の馬場駿吉氏の言葉である。本作は、江戸川乱歩、小酒井不木と深く交わり、第1回直木賞の有力候補にも挙げられた作家・岡戸武平の評伝小説。武平は、昭和初年ごろから名古屋で活動し、戦後は名古屋タイムズの創刊にかかわり、企業ノンフィクションの書き手

としても活躍した作家である。寺田の前作の主人公である父・寺田栄一も武平の友人として作中に登場し、当時の名古屋文化人の生態を活写する。代表作に小説「小泉八雲」のある岡戸武平だが、今では知る人ぞ知る「幻の作家」と言われる。彼の起伏に富み闊達な人生は、そのまま昭和名古屋文壇の軌跡とすることができよう。

戦前に存在した「外地」の書店と本の流通業者である取次店の歴史をたどった名古屋大学大学院教授・日比嘉高の『帝国の書店 書物が編んだ近代日本の知のネットワーク』（岩波書店）は、他に類を見ない文化・経済史であるとともに、戦時下に本とともに生きた人びとの記録としても読むことができる。大日本帝国の海外侵出は多くの人間の移動を生み出したが、そこには書物の移動が伴った。植民地に形成された書物の流通ネットワークが、内地・外地の読者を戦争賛美という思想で結び、戦争遂行に大きな影響を与えたことが解き明かされる。そこには経済的な理由から、自発的に統制下に入ろうとする出版界の姿さえ見られる。新しい戦前、と言われる時代状況の現在、およそ書物や文字にかかわる人間はこれを知っておくべきである。

令和7年度 名古屋市芸術賞

令和7年度名古屋市芸術賞は、次の方が受賞されました。「芸術特賞」は、長年にわたり優れた芸術創造活動を行い、かつ、近年における活動が顕著で、名古屋市芸術文化の振興に大きな功績のあった方に、「芸術奨励賞」は、継続的に活発な芸術創造活動を行い、かつ、将来の活躍が期待され、今後とも名古屋市芸術文化の振興に寄与することを期待できる方に贈られるものです。

芸術特賞

きの した しん ぞう

木下信三 【文芸(文学調査)】



昭和9(1934)年、名古屋市生まれ。昭和41(1966)年に個人雑誌を刊行し始め、独自の視点で文学研究と執筆を継続。昭和45(1970)年からは俳人・種田山頭火の足跡を全国で丹念に追う実証研究に取り組み、「山頭火伝」など多くの著作を通じて研究の深化および再評価に貢献してきた。また名古屋近代文学史研究会で地域文学史の掘り起こしを牽引し、後進の育成にも尽力。さらに亀山巖氏との深い信頼関係のもと託された貴重な文学資料を整理・研究し、名古屋市へ寄贈するなど、名古屋の文化的資産の充実にも多大な貢献を果たした。

芸術奨励賞

い とう み ゆ き

伊藤美由紀 【音楽(作曲)】



平成7(1995)年、愛知県立芸術大学を卒業。文化庁芸術家在外研修員としてフランス国立音響音楽研究所で研鑽を積み、さらにコロンビア大学で博士号を取得。国際的な経験を背景に、国内外の音楽祭や演奏会で作品を発表し、委嘱作品も多数手がけるなど優れた創作活動を継続している。平成17(2005)年からは自主企画公演「ニンフェアール」を主宰し、テクノロジーや映像、文学との融合による独自の音楽表現を展開。国内での受賞歴も重ね、教育・講演を通じた後進育成にも力を注いでいる。

ろん と

LONTO 【演劇(道化師)】



平成11(1999)年より国内外で道化を学び、道化師として活動を開始。平成17(2005)年には言葉を用いないノンバーバル表現による独自の作風を確立し、アメリカ道化師世界大会(WCA)で個人・団体部門ともに金賞を受賞するなど、早くから国際舞台で高い評価を得た。平成30(2018)年にはChang氏と「ラストラーダカンパニー」を設立し、障がいや国籍を越えて伝わる舞台作品を手掛けている。愛知を拠点に全国各地で巡演を行い、子どもから大人まで文化芸術に親しむ機会を広げる中で、劇団指導や伝統芸能との共演など活躍の幅を広げ、舞台表現の新たな可能性を切り開いている。

しば た ま い

柴田麻衣 【美術】



昭和54(1979)年、愛知県生まれ。名古屋芸術大学大学院を修了後、平成16(2004)年に名古屋市で初個展を開催。以降、愛知・名古屋を拠点に東京、大阪、京都などでも個展を重ね、精力的に発表を続けている。平成25(2013)年には若手作家の登竜門とされるVOCA展で奨励賞を受賞し、その後も個展や主要なグループ展への出展を重ねるなど評価を高めている。作品は、「空間・風景・思想」を軸に、抽象と具象を交差させたレイヤー構造で光と色の静謐な奥行きを表現。感情や思索を喚起する世界観を特徴としている。歴史や宗教、環境など多彩なテーマを掘り下げ、年々その活動を深化させている。

名古屋市民芸術祭2025

名古屋市民芸術祭賞

名古屋市民芸術祭は総合的な芸術の祭典として、毎年10月、11月に開催しています。今年度は参加20公演（音楽9、演劇5、舞踊3、伝統芸能3）の中から部門ごとに、特に優秀な公演に「名古屋市民芸術祭賞」を、また、特に表彰に値する公演に「名古屋市民芸術祭特別賞」を授与しました。

名古屋市民芸術祭賞（3公演）

【音楽部門】

吉田文パイプオルガンリサイタル
The Leipzig Connections 1908
-風琴浪漫の知られざる英雄たち-

●11月26日（水） ●愛知県芸術劇場コンサートホール

後期ロマン派以降の知られざる優れた作曲家を取り上げ、オルガン音楽の魅力の幅を広げる意欲的な演奏会であった。作品の世界に一気に引き込む演奏が観客を魅了ただけでなく、作品とその背景についての緻密な研究成果をパンフレットやトークを通してわかりやすく伝える工夫が随所に見られた。オルガン音楽の地元への普及にかける真っすぐな熱意が伝わる感動的な公演であった。



【演劇部門】

ハコトバコ第4回本公演「BRUTE」

●10月10日（金）～13日（月） ●G/PIT

重いテーマ設定に真正面から挑む姿勢を最後まで貫き、コミカルな要素を織り交ぜることで、若い世代の観客が自分事として受け止めやすく工夫された見事な構成だった。演劇だからと妥協しないチャレンジにより、脚本、演出、役者の座組が一丸となって演劇の枠を広げるリアリティを創出した点も高く評価する。さらに、観客を檻の中の生物に見立てて物語へ巻き込む演出が臨場感を生み、会場が一体となる好演に魅了された。



【伝統芸能部門】

第10回なごや古典らびが
～古典の真髄 未来への継承～

●10月25日（土） ●名古屋能楽堂

箏、三絃、尺八、地歌がうまく溶け合う合奏が見事で、表現力豊かな円熟味のある素晴らしい演奏だった。また、尺八の演奏方法の違いを楽しめる意欲的な構成も秀逸で、古典の真髄を感じさせた。加えて、能舞台を生かし、虚無僧姿の尺八奏者が橋掛かりを進む演出は観客の心をつかんだ。プログラム解説も丁寧で、伝統芸能を次代に受け継ごうとする意欲を感じる公演だった。



名古屋市民芸術祭特別賞（4公演）

【音楽部門】（クリエイティブ企画賞）

Duo Aurea Donna Onna ～歌曲でたどる女性作曲家の世界～

●10月19日（日） ●Halle Runde

ドイツ歌曲の伝統を踏まえた確かな歌唱と、渡独して研究した成果に裏打ちされたピアノ伴奏が相まって、高いレベルのアンサンブルを実現した。単調になりがちなりートの演奏会に、女性作曲家の人生に焦点を当て、その手紙を軸に演劇的要素を織り交ぜる演出や、若手作曲家による新作初演を盛り込むプログラム構成によって、最後まで聴衆を引き込む意欲に満ちた演奏だった。



【舞踊部門】（アンサンブル創造賞）

内田好美フラメンコソロ公演「孤独生」Vol.4/10 ～徨～

●11月9日（日） ●東文化小劇場

ハイレベルな演奏と踊りの息がぴったりと合い、一体感のあるステージが観客を魅了した。セリフや歌などの要素を取り入れたドラマ性のある独創的な構成は、フラメンコの伝統的なスタイルに新たな方向性を示すものであった。テーマ設定にはさらなる発展の余地が感じられたものの、確かな技量をもって演奏との見事なアンサンブルを創り上げており、さらなる飛躍が期待できる舞台だった。



【演劇部門】（奨励賞）

劇団サカナデ第5回本公演「この音はどこまで」

●11月28日（金）～30日（日） ●G/PIT

高校の吹奏楽部の活動という小さなコミュニティにおける葛藤を、生徒の視線だけでなく顧問のエピソードも交えて、現代のリアルな視点で描き出した秀作だった。日常に垣間見えそうな場面設定により観客の共感を得ながら、短い上演時間の中で過不足なくまとめ上げた脚本のセンスも光った。役者の力を必要とするワンシチュエーションのシンプルな会話劇に仕上げた潔さは脱帽ものだった。



【舞踊部門】（オマージュ・ビデオ賞）

アカデミー国枝バレエ2025公演
「シンフォニー・ファンタスティック～ある男の物語～」
～pour les jeunes～ 〈第2部〉

●11月30日（日）
●青少年文化センター アートピアホール

難易度の高い深川秀夫作品に意欲と敬意を持って挑戦し、高い構成力を発揮してまとめ上げ、優れたゲストにも支えられて、総合的に見応えのある舞台を創り上げることに成功した。幻想的な世界観を表した舞台の終盤を飾る狂乱の群舞には、これからの成長を予感させる若手ダンサーたちから、溢れるエネルギーを感じた。将来の担い手の成長と飛躍にかける想いが伝わる舞台だった。



#zoom up

ズーム・アップ

バレエダンサー

は せ が わ も と し

長谷川元志さん

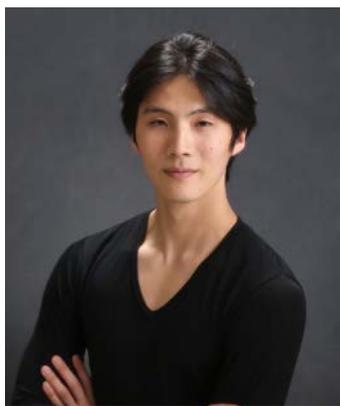
音楽の波に乗って

長谷川元志さんは神澤千景バレエスタジオ所属で、中部地区を中心に活躍するバレエダンサー。

2025年10月開催の第46回中部バレエフェスティバル『眠れる森の美女』では青い鳥を好演。また、令和7

年度名古屋市民芸術祭特別賞受賞作品、アカデミー国枝バレエ2025公演『シンフォニー・ファンタスティック～ある男の物語～』では主演を務めた。活躍を続ける長谷川さんに、バレエと向き合ってきた歩みと、これからについて伺いました。

(聞き手：大寺資二)



バレエを始めたきっかけは？

特に強いきっかけがあったわけではありません。小さい頃から水泳やピアノなど、さまざまな習い事をさせてもらいました。水泳ではすぐに上級クラスに上がり、ピアノでも早くからコンクールに出られるようになるなど、器用なタイプだったと思います。ただ、どれも長続きはしませんでした。



バレエスタジオにて、妹と
(小学生の頃)

小学4年生の頃、妹がバレエを習っていたこともあり、「何もやっていないなら、やってみたら？」という軽い一言がきっかけで始めたのがバレエです。最初は正直、嫌でした。男の子は自分一人、レッスンは基礎ばかり、先生は厳しい(笑)。

それでも、神澤先生のもとでなければ、きっと続かなかったと思います。中学生の頃、コンクールに出場した際に、男性ダンサーが多く出場していて、しかも皆とても上手だった。「こんなふうに踊れたら楽しいだろうな」と感じ、少しずつ本気でバレエに向き合うようになりました。



「神澤千景バレエスタジオ 第4回発表会」
(2006年3月)

ただ、将来の職業にするつもりではなく、大学進学を考えていた高校1年生の夏、同じバドミントン部だった友人が突然亡くなるという出来事がありました。テレビのニュースでも取り上げられ、「自分はこのままでいいのか」「恥ずかしくない生き方をしたい」と強く思うようになり、バレエを本気で続けていく決意を固めました。

影響を与えてくれた出会いは？

何よりも大きな存在は、神澤千景先生です。

「コンクールに一度出てみよう」「次は発表会に出よう」「今度は男性がたくさん出演する舞台があるよ」——先生はあの手この手で、常に僕のモチベーションを引き出してくださいました。当時の僕は断れない性格でもあり(笑)、その度に「はい、そこまで頑張ってみます」と続けてきました。そうしているうちに、気づけば努力は楽しさへと変わり、今の自分に繋がっています。もし神澤先生との出会いがなければ、僕はきっとバレエの世界にはいなかったと思います。



神澤先生の指導のもと
レッスンに励む

外部のバレエ団にゲスト出演するようになった21歳の頃。神澤千景バレエスタジオ15周年記念第8回発表会『シンデレラ』で、初めて全幕作品の王子を踊らせていただきました。もともとネガティブな性格なので、「本当に僕で良いのだろうか」と不安もありましたが、振付の篠原聖一先生から細やかにご指導いただき、無事に踊り切ることができました。この経験は、大きな自信となり

ました。

そしてもうお一人、振付家の市川透さんとの出会いです。市川さんは非常に独創的な作品を創られる方で、クラシック作品であっても既存の物語にとらわれず、ご自身で深く物語を紐解いていきます。創作作品の主演を踊らせていただいた際、「なぜそうなるのか」を一歩手前ではなく、もっと前段階から考えることを求められました。

それまでの僕は、与えられた振付を正確に踊ることに意識が向いていました。しかしその経験以降は、神澤先生のもとでのレッスンを土台にしながら、自分なりに解釈を重ね、役と向き合うようになりました。どこまで出来ているかは分かりませんが、今も踊りに向き合う姿勢の核になっています。



篠原聖一先生(左)、神澤千景先生(中央)と

僕は東京や大阪、海外のバレエ団に所属しているわけではありません。以前は少し意地もあり、「所属していなくても、どこかのバレエ団から招かれて主演を踊ること」が夢でした。

そして2022年10月、関西の法村友井バレエ団で『ラ・シルフィード』全幕の主演を踊らせていただきました。その舞台は、まさに夢が叶った瞬間であり、今も強く心に残っています。

出会いが、今の自分をつくっている——そう実感しています。



法村友井バレエ団『ラ・シルフィード』(2022年10月)
Fumio Obana (Officeobana)

ダンサーとして心がけていることは？

踊る際に一番大切にしているのは音楽です。振付は必ず音楽に沿って創られているものなので、常に音楽の流れや波に乗ることを意識しています。以前、音楽をとっても大切にされている振付家の山本康介さんの作品に出演した際、「自分が大切にしてきた考え方は間違っていなかったのだ」と、あらためて確信しました。

一方で、年齢とともに怪我と向き合わざるを得ない時間が増えてきました。以前であれば「多少の無理は何とかなる」と精神力でカバーし踊りましたが、今は通用しなくなってきたと感じています。足首や膝など、無意識に使ってきた部分に歪みが生じ、身体全体のバランスの崩れを実感するようになりました。その危機感から、最近はピラティスというエクササイズの技法を取り入れ、体幹を正しい位置に戻すこと、筋肉を正しく使うことを意識しています。怪我は怖いものですが、同時に自分の身体と真剣に向き合うきっかけにもなっています。

バレエをやってきて良かったこと、そしてこれからの抱負は？

多くの選択肢がある中で、バレエの世界を選んで本当に良かったと思っています。違う道に進んでいた自分を想像することはできませんが、今こうして幸せだと感じられるのは、踊ることが好きだから。この選択に満足しているからだと思います。苦しいことはたくさんあります。それでも、それ以上に楽しい。どれだけ身体が痛くても、舞台上立った瞬間、不思議と気持ちが切り替わり、楽しさが勝つ。そんな経験を何度も重ねてきました。この仕事に就けたことに、心から感謝しています。これからも毎回新鮮な気持ちで舞台と向き合い、楽しみながら作品を創り、踊り続けていきたいと思っています。これまでは、踊ることに専念して歩んできましたが、最近は神澤バレエスタジオで指導に携わる機会をいただくようになり、バレエダンサーたちが成長していく姿を見ることに大きな喜びを感じるようになりました。これからは自身が踊り続けることと同時に、指導者として、次の世代へとバレエの魅力を伝えていきたいと考えています。



神澤千景バレエスタジオで
次世代へ技術を伝えるレッスン風景

なごや文化は寄附でもつ



名古屋文化基金

— 市民やアーティストによる文化芸術活動を支援・育成 —

支援・育成事業



参加・体験事業

— 市民だれもが参加できるワークショップ・公演等を実施 —



— 優れた舞台芸術を鑑賞する機会を提供 —

鑑賞事業



市民文化の情報発信

— 情報誌の刊行などを通して、様々な文化情報を発信 —



皆さまからいただいた
寄附金を活用し、
なごや文化創造のための
様々な事業を展開しています!

名古屋市文化基金の
詳細および
寄附のお申込みは
こちら



ご寄附に関する
お問い合わせ

名古屋市観光文化交流局
文化芸術推進課
TEL 052-972-3172

公益財団法人
名古屋市民文化振興事業団
TEL 052-249-9390

いつでもどこでも。
スマホやタブレットで「なごや文化情報」!

「なごや文化情報」
マルチデバイス対応の
お知らせ

1984年4月の創刊以来、名古屋圏域の文化芸術を広く紹介してきた「なごや文化情報」。スマートフォンやタブレットで、いつでもどこでも、気軽に手軽にご覧いただけるよう、ウェブサイトのマルチデバイス対応を準備中です。

2026年6月発行のsummer号から対応予定!



叙勲・褒章
表彰状レプリカ
製作サービス

- ◆ 印刷のプロが1点1点手作業で複製します。
- ◆ 用紙にもこだわり実物に近いものを採用。



お問い合わせはこちらへ
駒田印刷株式会社 tel.052-331-8881
〒460-0021 名古屋市中区平和2-9-12 <https://www.kp-c.co.jp>

WE MAKE YOU MOVE
感動をあなたへ

20Hz ← → 20kHz

A&V
PRO AUDIO & VISUAL & NETWORK
舞台音響 / 映像設備
設計・施工・保守・特注品製作・業務用機器販売

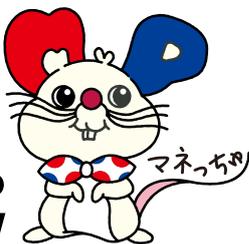
お客様に寄り添った先進のAVシステムを提案する
株式会社 エーアンドブイ
〒464-0846 愛知県名古屋市中区栄区城木町二丁目98
TEL/052-761-5400 FAX/052-761-0909

公演・発表会の受付から制作業務全般まで、何でもご用命ください。美術展の受付も対応いたします。

業務内容

- ①舞台の企画・制作マネジメント
- ②イベントの企画制作
- ③芸術団体のコンサルティング
- ④舞台・イベントの運営

MANAGEMENT PRO
株式会社 マネージメント・プロ



〒461-0004 名古屋市中区葵2-11-22 アバンテージ葵ビル301
TEL:(052)508-5095 FAX:(052)508-5097 Web:www.mane-pro.com

「ナゴヤ劇場ジャーナル」ではサポート会員を募集しています。

ナゴヤ劇場ジャーナル

- ◎年間6,600円で毎月お手元にお届けいたします。
- ◎毎月24,000部発行
- ※東海地方の演劇・バレエ・音楽公演、ホール、DM等にて配布

E-mail:mane-pro@mane-pro.com